



# 六花

1

2020

りっかはいくかい

紳

その三

山田六甲

初舞や三味線皮に猫の乳  
投扇興明石浮舟若菜じやう上  
初句会神酒一杯も吞めぬとは  
前浜のたらこは焼かず年の酒  
福錦とくとくとくと年酒かな  
寒の夜の柳葉魚茶漬でメにけり  
封を解く出てさん花さんの福茶かな  
書初や大好山水墨を磨り  
干支入りの墨もらひけり筆始  
条幅に色紙包める炬燵かな  
袖口が濡れしままなる三日かな  
あれから四十二日目の初日やね



出石を「その一」とし去年を「その二とし  
今年を「その三」とする。何時まで行ける  
かどうかは、分からないが……。

追羽根の風には負けじ舞ひつつも  
おのころの社はしづかひめ始  
湯の宿のひと間に祝ふ節料理  
初湯かな淡路岩屋の銭湯に  
初深空晴れわたりたる昼の星  
初凧のおのころ島へ渡りけり  
初凧や舟の水棹の乾きぬて  
あちこちで雨戸引きぬる二日かな  
年越蕎麦伊予松山のくづしあり  
母上の干数の子の夢を見し  
除夜の夜の場合に猫の会議あり  
温石や翡翠を秘めてをりしかと

くづしは蒲鉾

糸魚川に拾ひし

# 雪嶺抄 良夜 笹村 政子

渡り鳥空の青さを抜けだして  
良夜かな海へとつづく屋根明り  
風ありて連なり落つる芋の露  
片脚はうしろに隠しある案山子  
たそがるる日に艶めける花芒  
秋の蚊の声はすれどもかかはらず  
無花果の匂ひただよふ出荷あと  
実ざくろや吾子は母乳を知らぬまま  
うつ伏せに吾子の眠れり蜜柑むく  
急かさるる三年坂の初しぐれ

# 蟋蟀抄

# 窓の朝

# 志方 章子

虫の声ふと我あるを気付きけり  
一人より二人の淋し窓の月  
残暑きびし雲は怒りの拳あげ  
砂糖黍しがみし乙女時代かな  
萩の戸に入るも父母とうになし  
爽やかや十三日の金曜日  
秋冷や心療内科のクラシック  
まんじゅしやげ地球  
はいつか滅びけり  
鯛雲日射しこんな**に**強くとも

# はまなす抄 秋寂ぶ 升田ヤス子

収まらぬ旅の荷後の更衣  
石の斑となりてとどまる秋の蝶  
風鐸にひかり残れる秋夕焼  
中天に薄紙の月五重塔  
秋寂ぶや塔の影負ふシテの舞  
序の舞に上弦の月傾きぬ  
音違へ石の奏でる秋の水  
談らひ山三つに裂けし椿の実  
鞠坪や枯葉が空にひとつ舞ひ  
秋桜観音を説く尼僧の手

# 藤生不二男

# 大鷲

# 山稜抄

地にも触れ萩の盛りとなりにつけり  
今年藁青き湿りの匂ひけり  
三脚の藁塚百基黄昏る  
裂けし実の哄笑したる柘榴かな  
常磐木の幹にからまる蔦紅葉  
仰向けに乾びつくして鴟の糞  
蓮の実の飛んで日暮るる空のあり  
西国のふるさとの畦曼珠沙華  
残菊の息深うしてにほひけり  
大鷲の昇りつめたる高さかな

雪卿集 せつけいしゆう

谷口 一献

永田万年青

曳山に月影かかる鞍馬かな  
月一輪縁に家宝の将棋盤  
赤ワイン月の雫を落としけり  
少子化のなき時代あり夜長し  
休肝日我が辞書になし夜長かな  
熱爛や静寂の夜を過ぐすとす  
深酒に呂律回らぬ秋浅し  
そぞろ寒甘酒婆と酌み交はす

満月のそのまま入りし胸の中  
月光を返してゐたる城の壁  
山寺の白壁長し秋の雨  
白壁をそぞろ歩きし秋の声  
白壁の曲がりつつける秋深し  
秋風や壁あるごとくささやきて  
潮の香と海光来たる蜜柑山  
大橋を影絵に釣瓶落としかな

善野 行

住田千代子

なり秋を掌に確かむや鳶の笛  
洋館の壁は見えずよ蔦紅葉  
屈託の多き日よさて秋刀魚焼く  
蕎麦の花すがに広がる小野の道  
朝ごとに刈田増えゆく美囊の里  
父と子のかたみに一語けふの月  
夕闇や風待つ庭の風の音  
真直なる水路をさやに曼珠沙華

階段を一段戻りゐる残暑  
秋蟬の声の重なる奥地かな  
高原の尾根に伸びたる鰯雲  
秋天を穢しをりけり鳶の声  
落鮎の早瀬になびく穂草かな  
爽籟の木椅子に時を委ねけり  
吹きおこる風に抱かる花芒  
右向かばもう変はりぬし秋の空

出口 誠

田尻 勝子

曇天に太鼓のひびく秋祭り  
天狗面鼻まつすぐに秋祭り  
特賞はなんとドローン秋祭り  
動かざるばつたの目立つ白き壁  
後ろ足引きずつてをり飛蛙かな  
秋桜新天皇の即位の日  
秋雨に万歳三唱ひびきをり  
ゲームする少年よそにみかん食ふ

踊り子の急に消えたり風の盆  
白壁の倉の家紋に秋の雨  
満月や伴に髪を撫でられて  
白壁を背にして秋に溺れけり  
海鼠壁越えて柿の実の垂るる  
鬼やんまトルコブルーの腰飾り  
ワックスで白髪立てて忘年会  
無より出て無に帰りたる秋の風

# 雪樹集

大内 幸子

廣畑 育子

宮山の遠く近くに鹿の声

初月や草履保育の三姉妹

駐車して更地を埋める運動会

白杖の人に肩貸す月の宵

川へだて孤高の银杏遠眺め

夜干しして月に袖振る拘束衣

银杏を拾ひて戻る黄金径

帰るには早すぎて鶏頭に佇つ

カラフルな1輛列車爽やかに

纏れ毛糸なり鶏頭枯れはじむ

誰彼と付きまどふ猫身に入むる

枯蟪蛄腹ぶにぶにと押されをり

平居 濤子

江見 巖

姉弟等しく愛し秋彼岸

晩稻刈る案山子一本残りけり

紺の地に銀の経文秋扇

枝豆を引き抜くたびに分け与へ

線香をくゆらす六階虫の声

女郎花鯨幕より喪服かな

眠れぬと月を見てゐる漢かな

ねねの道こぼして行くや萩の道

ほろ酔ひの父を見送る月夜かな

衣被前も後も嘘だらけ

月光や秘仏あらはになり給ふ

割腹の中身みせたる通草かな

延川 笙子

延川 五十昭

なまこ壁続く街道萩の花

文晁の古画を見てゐる鬼虎魚

月漏るる崩れし壁の隙間より

遊廓の濡額の金秋夕焼

明月や壁にもたれて一人酒

航跡にしぶいてゐたる小木湊

板壁の丸岡城や月清し

鱒つりの竿を向けたる荒磯海

牛小屋の壁際に咲く彼岸花

おけさ柿食へずに帰るなごり雨

鶴の絵の抜け出て来たる秋灯火

温めし新酒を酌むや浜の宿

六花集



磯野青之里

清水（せいすい）のいよいよ透けり新豆腐

長き夜やルーペめがねの別世界

今年蕈結へる二本も今年蕈

摘まみ捕る青虫太し雨上がり

木犀の咲き誇るかな即位礼

石川 憲二

小振りなる銀杏苔の上に落つ

犬枇杷の枝太きあり秋の蝶

やまずげをかき分け生ゆる茸かな

霜降や雨に静けき森の朝

雨落ちて森の木の葉の跳ぬるかな

北村ちえ子

台風や急いで作る夕御飯

台風後団栗道や櫟の実

台風後溝の中には草木あり

待合室みかん並べてバス友と

孫からは誕生祝とみかんゼリー